銭単士釐 撰、鈴木智夫 訳註
癸卯旅行記訳註
——銭稲孫の母の見た世界
〈汲古書院、二〇一〇年一二月、二七〇頁〉

清国外交スタッフの一員として一八九九年（明治三二）に初来日した銭恂の夫人である銭単士釐（以下単士釐と記す）の執筆になり、一九〇三年、旧暦癸卯の歳における日本からロシア全土を西へと進む旅行記が、このたび見事な翻訳を得て刊行された。中国近代史研究の碩学鈴木智夫訳の『癸卯旅行記訳註——銭稲孫の母の見た世界』である。単士釐は浙江蕭山の名家に生まれ、『清閨秀芸文略』など数篇の詩文があり、内外の女性史の分野で注目されつつある存在である。その長子銭稲孫は『漢訳万葉集』、有吉佐和子の『木偶浄瑠璃』などの翻訳がある優れた日本文学研究者だが、日本占領下の北京大学で学長を務めたため、国民政府から「漢奸」として重罪に処された。同年輩ながらその叔父の銭玄同は五四文化運動の担い手として知られる。

本訳書は、第一に、訳者による簡にして要を得た「解説」、第二に、原著の訳文、第三に訳文を補うところの委曲を尽くした大部の「訳者註」、第四に訳者の注いだ心血を窺わせる「あとがき」から緊密に構成されている。訳文が通常と異なり、現代日本語訳ではなく、原著の中国古典文、すなわち「漢文」の書き下し文であることは本訳書の大きな特色となっている。原著の類まれなる明晰さをあえて損なわず、その息吹を読者に感得せしめるために施した訳者の配慮であり、その企図は見事に成功して、時代の息吹を今に伝えている。

単士釐は、本旅行記で、二〇世紀初頭、義和団事件直後、日露戦争を間近に控えた北東アジア各国の内的な社会状況と相互の国際関係を的確に描き出す。まず、巻上では、当時の日本のもつ肯定的側面、特に大阪での第五回内国勧業博覧会「教育館」の観察に見られる、目覚ましく進む市民及び女子の教育についての生き生きとした記述とそこに滲み出る著者自らの真剣な生き方が、深い感銘を与える。巻中に入り、記述の対象は、自国の上海から釜山・元山を経、ロシアのウラジオストク、黒竜江省、ハルビン、チチハル、更に大興安嶺を越えて、内蒙古自治区のホロンバイル、満州里に及び、巻下においては、広大なシベリアを経て、最後にモスクワ、ペテルブルクに達する。眼前のロシアの大地と社会の風気を活写し、中央部の豊かな歴史的蓄積にも筆を惜しまない。この間、日本での知見に基づくコメントが通奏低音のように響くとともに、他方で、人類進化を五段階に分かつ壮大な歴史観が読者を圧倒する。「解説」では、単士釐自身の好意的日本観が日露戦争後に劇的に変容したことが示唆される。評者は、単士釐の深さを示すこのことへの立ち入った言及をあえて避けた訳者の自己抑制を瑕瑾として惜しむ。

（森 正夫）